

## 「くりさがりのあるひきざん」(第1学年)

## 1 提案の主張点

## (1)単元について

本単元では、数図ブロックを操作し、「減加法」や「減々法」を児童自ら考え出し、「減加法」のそれぞれの方法のよさや特徴がわかってからまとめていきたいと考えた。また、算数的な表現力を育てるために、まず、計算を数図ブロックで操作し、その操作を図にかき、簡単に説明も書くようにさせた。

## (2)実践

課題把握の場面では、考える意欲と見通しをもって自力解決させるために、「今までと同じところ・違うところはあかな」「何を使って考えようかな」の2つの観点を全員で検討した。

自力解決の場面では、まず、「 $13 - 9$ 」の計算を数図ブロックで操作し、それを図やことばでかき表し、自分の考えを整理させた。さらに、9の動かし方が伝わる作戦名をつけさせた。

高め合いの場面では、まず、自分のかいた図を見せながら考えを紹介しあうペアの交流をさせた。その後全体交流をし、9の動かし方の違いを認識させ、自分の考えは「減加法」「減々法」のどちらであるか判断させた。

定着の場面では、友だちの考えを自分でもやってみる、体験させることでよさの発見につながった。

## (3)成果( )と課題( )

自力解決の前の話し合いで見通しをもつことによって、どの児童も自分の力で解決していこうとする意欲をもつことができた。

自分の考えを他の考えと比較することによって、それぞれの考えのよさを見つけ、よりよい方法で解決していこうとする態度が育ってきた。

自分の考えを図やことばで表すことで、より分かりやすい図などがかけるようになった。これは、数学的な考え方の土台となっていくと考えられる。

教師自身が児童につけたい力を明確にし、評価を具現化することで、児童への支援も的確に行えた。児童に必要なきめ細やかな支援をすることで算数的な表現力、数学的な考え方の育成が図れる。

出された考えをみんなでよりよいものにまとめていくなど、全体交流を充実させたい。

## 2 提案に対する意見

Qペアの交流を取り入れているが、交流の仕方を具体的に知りたい。

A 17名という少ない人数なので目が届きやすい。また、個人差も小さい。自分のことばで語らせることが大切であると思い取り組んでいる。

- ・1年生でも操作を図にかくことで自分の考えを確かなものにできる。積み上げが大切であると思う。

- ・見通しをもたせるということは、既習事項を洗い出し、何が使えるか、どんな方法が使えるかということだと思う。

- ・数字のイメージができない子どもはブロックではできても、式ではできない。できない場合はずっとブロックや数え棒を持たせてやっている。いつ、具体から抽象に移させたらよいのだろう。

## 3 御指導

- ・13から9をとる…子どもたちのとり方と計算方法は違う。とることと計算はつながっていない。

- ・教師は授業の最後は計算で終わらせたい気持ちになる。しかし式を急いでいない。大切なことである。 $13 - 9$ の動かし方ができたら $15 - 9$ はどうかとどんでできる場を設けるとよい。

- ・指導と評価の一体化ということでB基準の見直しが必要である。

- ・数図ブロックは数え引きのためには持たせたくない。次のステップにつなげられるように持たせたい。

- ・算数を創り出す学級ができている。

- ・ここでは、「減加法」「減々法」のどちらも扱っているが、子どもの実態を大切にしながら「減加法」にまとめていく。簡潔・明瞭・的確という点を大切にしたい。

- ・見通しをもつということを大切にしている。「 $13 - 9$ の計算を考えよう」でなく、「9の動かし方を考えよう」。これは、論理的な思考につながっていくので大事にしたい。

- ・念頭操作までたどり着くには、具体 半具体 抽象とスパイラルしながらつながっていく。